

ながら見守り活動

佐賀県佐賀市 高木瀬まちづくり協議会(子ども見守り部会)

1. 地域の概要

佐賀市は、佐賀県の中心部に位置する県庁所在地で、約10万6千世帯、人口約22万4千人(令和8年4月末)。また、概ね小学校区毎に市立公民館が32館設置されている。

高木瀬校区は、佐賀市周辺部の都市化が進み、昭和53年(1978年)には高木瀬の一部が若楠校区として分離したが、以降も人口は増え続けている。令和8年4月末で6653世帯、1万4275人、15自治会。また、令和8年5月の高木瀬小学校の児童数は865人で、佐賀市内で最多である。

2. 「ながら見守り活動」

(1) 高木瀬まちづくり協議会(まち協)

平成28年7月に、自治会、社協など地域の各種団体が緩やかなネットワークを作り、「みんなで支えあう 住みやすいまち 高木瀬」をスローガンにまち協が発足した。本部のほか、子ども見守り部会などの3部会が公民館を拠点に活動をしている。

(2) 子ども見守り部会が取り組む

「ながら見守り活動」とは

『できる人が、できるときに、できる範囲で』を合言葉に、ウォーキング、ジョギング、買い物、犬の散歩、花の水やりなどの日常活動をし『ながら』、主に登下校時間帯に不

審な人物や車両がないか等をちょっと気にかけることで、犯罪が起きにくい環境をつくり、子どもや地域の安全を守ろうとする活動である。

(3) 「ながら見守り活動」のきっかけ

平成27年度に自治会、社会福祉協議会、高木瀬公民館の主催で「地域課題解決講座」登下校時の児童の安全安心のために「」を4回開催し、見守りを取り組むという方向性を確認し、地域で子どもを見守る下地があった。加えて令和2年に警察の防犯講習会で、「ながら防犯」活動を知り、ヒントをもらったことからこの活動はスタートした。



(4)「ながら見守り活動」の具体的な活動

① 令和3年度(1年目)

どうすれば「ながら見守り活動」を広げられるのか、公民館職員も参加する見守り部会の小委員会で何度も協議を重ね、「ながら見守り活動」は5か年で「カタチ」を作ること目標とした。そのためには、住民への周知が大事と考え、「ながら見守り活動」の紹

介と活動者募集の全戸配布チラシ等を作成し、各種団体の会合に出向き、協力要請の説明を重ねた。

② 令和4年度(2年目)

「ながら見守り活動者」の勧誘を本格的に開始し、活動者用のグッズも作成した。9月に「活動者説明会」(約40人参加)を行い、10月末には約200人に迫る登録があり、翌11月に200人を突破したことに加え、児童、住民に周知するために、市教育長、警察などを招いて高木瀬小学校で「ながら見守り活動出発式(子ども見守りたい)」を行った。参加者は全員おそろいの登録証(首から下げる名札)をつけての参加だ。

③ 令和5〜6年度(3〜4年目)

両年度とも「ながら見守り活動者のつどい」と「ながら見守り講演会」を開催した。ヒントをいただいた福岡市在住の今泉重敏氏を招き「ながら見守り活動」の手法について紹介していただいた。また、佐賀市から「まなざしきりり大賞」(市民総参加の子ども育成運動)をいただいた。

5年計画の折り返し点を過ぎたため、活動者に対しアンケート調査を実施した。(結果は後段で紹介)

④ 令和7年度(5年目・計画の最終年度)

新規事業として、地域を支える大きな働きを担ってもらっている店舗などにも参加



ながら見守り活動出発式



ながら見守り講演会



ながら見守り活動参加者のつどい



朝の声かけ



つどいの様子

してもらうため、子ども110番協力店舗に働きかけを行い13店舗の応募があった。「ながら見守り活動参加者の集い」と「ながら見守り講演会」もこれまでどおり行った。

3. 評価と課題

(1) アンケート調査結果から見てくる

取り組みの評価

5年計画の後半を迎える4年目の令和6年に実施し、247人を対象として回答は124人(回答率50・2%)だった。活動者の年齢は70歳代が最も多く約半数、80歳代、60歳代と続いている。活動内容は散歩が最も多く約6割。また頻度はほぼ毎日が4割を超え、週に数回(3割)と続いている。

今後どのように行っていきたいか?の問いには「今の形で続けたい」がおおよそ9割。自由意見には、生活のリズムができた、子どもに顔を覚えてもらい嬉しい、一日テレビの生活から外に出るようになったなど、肯定的な意見が多く見受けられた。なんとかうまく回っていると感じている。

(2) 課題

今年度は新しい計画を練っている。これからの課題としては、店舗等の取り込みがまだ13店舗と少なく、また、活動の中心層が高齢者のため、介護施設への入所等が避けられない。だから新規会員の確保も重要だ。それとグッズの更新も必要だ。ヒト、カネ、加えて熱意、気合いが必要だ。

4. まとめ

毎日の暮らしの中で「見守る」という「意識」を持つとまちの風景がそれまでとは違って見えてくる。お年寄りもそのようだ。そして小さな川や死角となるような街角も気になってくる。そこがこの活動の狙いでもある。

それからもう一つ、これが大きい。アンケートの自由意見で多かったのは子どもや通りがかりの方に声をかける、すると相手から声をかけられる。このちょっとしたコミュニケーションが「嬉しい」「楽しい」「喜び」になっておられる。この活動が生きがいを提供していて健康寿命を延ばしているなあ、とも感じている。

多世代のつながりを作るには地域の方の熱意と公民館のちよとした支え・両者のタッグが必要だ。佐賀市には「さあ!大人の出番です」というキャッチコピーの市民運動「子どもへまなざし運動」というものがある。これと連動して「ながら見守り活動」を佐賀市民運動にもつなげていきたいと考えてもいる。高木瀬校区の取り組みは徐々に動き始めたところだ。継続は力だ。これからも、続けようと気を引き締めている。

(高木瀬まちづくり協議会

子ども見守り部会長 山口俊治)